



渡辺一夫著作集 7



筑摩書房



渡辺一夫著作集7 フランス文学雑考 中巻

一九七一年三月三十日 初 版第一刷発行
一九七七年六月十日 増補版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四一二三

印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七七

フランス文学雜考 中卷 目次

端書.....3

A フランス近代文学雜錄（一九二五年—一九六九年）

昔のある「造反作家」の話.....9

天使になろうとして豚になること.....13

『青春の回想』（『ロマンチズムの歴史』）解説.....18

『ロレンザッチョ』について.....28

『ノートル・ダム・ド・パリ』について.....32

諷刺の悲劇（アンリ・モニエによせて）.....35

フロベールの残した問題.....73

『ボヴァリー夫人』の出帆.....80

『聖アントワヌの誘惑』解説.....90

フロベールとラブレール.....102

怪獸譚.....111

妖怪曼陀羅	120
Montfort と Abbaye de Solesmes... など	133
ヴィリエ・ド・リラダン小論	145
挿話	163
「贖罪山羊」の反逆	172
墓場と幻想	180
『未来のイヴ』解説	189
ヴィリエ・ド・リラダンの心やましき	193
『トリビュラ・ポノメ』について	200
「ポノメ博士」との一話	213
ヴィリエ・ド・リラダンの短篇について	223
理想の女性（ヴィリエ・ド・リラダンによせて）	229
アルフォンス・ドーデの面影	238
ゴーチエ宛のボードレールの献詞	245
ボードレールと僕	249

ルコント・ド・リールから辰野先生まで……………255

サント・ブーヴ管見……………269

幻想家テーヌ……………280

B フランス現代文学雑録（一九二八年—一九七〇年）

ポール・ブウルジェのこと……………285

アナトール・フランスのこと……………291

A・フランスとP・ブウルジェ……………295

ビエール・ロチと日本……………299

『アフリカ騎兵』後記……………303

ロマン・ロランを偲んで……………307

故豊島与志雄先生と『ジャン・クリストフ』……………313

闇——マルセル・ブルウスト読破術……………335

マルセル・ブルウスト管見……………341

アンドレ・モーロワの『ポール・ヴァレリーの方法論序説』……………346

ならず者ヴァレリー……………349

ヴァレリーの講演の思い出……………354

思い出のなかのヴァレリー	366
完成した『ルナール日記』	369
本郷に現れたクロード・ファレル	372
「人間ははたして人間的なりや？」	376
アルベール・チボーデ管見	380
チボーデの遺言	390
チボーデの『小説論』	394
チボーデ・バンダ・ブロック	399
聖職者ジュリヤン・バンダ	406
レーモン・ラディゲ小論	426
『海の沈黙』について	450
『新しいロシヤ』後記	459
はるかな幻	463
ジョルジュ・デュアメル戦争文学観	474
『バトリス・ペリヨの遍歴』解説	485
アンドレ・ジードの死	500
『けものたち・死者の時』後記	507

バリ劇団妄語（デュランとジャーヴェ）	510
バリで観た『ランディジャン』	516
コクトーの芝居によせて	520
配役表の夢（モンテルランの芝居によせて）	532

索引

巻末
1

フランス文学雑考 中巻

端 書

本『フランス文学雑考』中巻には、近代・現代フランス文学中の雑多な作家や作品について、一九二五年頃から最近にいたるまでの間に、求められるがままに書き散らした雑文が収めてある。目次だけは、壯観かもしれないが、どの雑文も羊頭狗肉であって、各作家を専門に研究して居られる方々から見れば、幼稚園児的な作文に外なるまい。本「著作集」を敢て編む決心をしたのは、既に「序」（『ラプレー雑考』上巻収録）に記した通り、臆面もない「私慾」の結果であるが、本巻の場合は、特に、この「私慾」が明らかに発揮されている。そして、ひとつひとつの拙い雑文も、私の告白的「記録」となっているから収録したという弁解しか述べられない。もし仮に本巻を読まれる方がいるとしたら、各雑文が綴られた時期（各文末に明記）について若干の注意を払っていただきたい。各拙文の内容の是非はとも角として、少しぐらいは、私の告白的「記録」にも興味を持っていただけるかもしれないと思っている。

全体をA「フランス近代文学雑録」とB「フランス現代文学雑録」との二つに分けたが、ポール・ブルジェやアナトール・フランスを現代文学作家としているところに、私の「お歳が知れる」し「お里も知れる」というものである。しかし、私の二十代三十代の頃は、確かにブルジェもフランスも、私にとって現代作家だったのであるから、いたし方ない。

「フランス近代文学雑録」中目立って多いのは、フロベールとヴィリエ・ド・リラダンとに関する雑文である。これは、この二人の作家が、二十代三十代頃の私に、はっきりとは自覚できなかったかもしれない影響を及ぼしていることを示すかもしれない。「フランス現代文学雑録」中にあるのは、アルベール・チボーデとジュールジュ・デュアメルとについて綴った拙文が多い。やはり何かの影響を私に及ぼしたのである。しかし、影響とは、時折、曲解誤解と同義になることがある。私の場合は恐らくそうだろう。私が、ブルウストやラディゲについて書いたということは、全くの「御愛嬌」である。

いくら濫読をしてきた私でも、対象がフランス近代・現代文学になると、二十代の時から七十に垂んとする現在にいたるまで、常に平均した量の雑文を綴ってはいないようである。やはり、模索時代とも言える二十代三十代に一番多量に拙い文章を書いている。本巻中、六十歳代以後のものは、僅か一つか二つぐらいあるだけであろう。老い花を咲かせることもできないのである。

いくら専門の研究対象が別にあっても、しかもその対象がやや昔の時代のものであればあるだけ、それ以外の時代にも関心を持ち、できるだけ広い視野を保とうと心がけねばならぬことは勿論である。その意味では、私の濫読もまだ不十分である。しかし、専門研究以外の調査は、自分だけの資料として大切に保存し、精神の糧とすべきであって、濫りに「附け焼刃」的な雑文などは綴るべきでない。これが、恐らく「学者」の当然の態度であろう。私は、そうしなかった。従って、私は、「学者失格」の見本となり得る。

本巻における各雑文の配列は、A・Bという項目内において、各々、取り扱われた作家の時代的順序に従い、雑文の執筆年代にはよらなかった。但し、同一作家（例えば、ヴィリエ・ド・リラダンの場合）や同一主題（例えば、B項末の演劇に関する雑文の場合）について、数篇の文章がある場合には、執筆年代順に従った。

明治学院大学教授清水徹氏が校正を見て下さり、様々な御教示を賜った。深く感謝する。

一九七〇年七月上旬

渡辺 一夫 識

A

フランス近代文学雑録（一九二五年―一九六九年）

昔のある「造反作家」の話

「古書の話」を書けという御注文である。私は珍重すべき古書を特に蒐集しているわけではない。必要上買い求めた書籍が年とともに古本の山となり、我が貧寒な書庫は足の踏み場もないようになっていくにすぎぬ。しかし、それでも、乏しい財布をはたいて苦心して入手したやや珍らしい古本が全然ないわけでもない。

十六世紀十七世紀頃の古書も三四部あるが、それを説明するためには、大方の方々には耳馴れぬ昔の異人たちのことに言及せねばならず、労多くして効少いことになるから御遠慮申上げねばなるまい。誰か有名な人物と関係のある古本をでもと考えたら、日本では割合その名が知られているシャルル・ボードレーを思い出したが、次いで彼に色々な影響を与えたいらしいシャルル・ラサイー Charles Lassailly の本を持っていることが、澁んだ記憶のなかからメタン瓦斯^{ガス}の泡のようにぶくぶく出てきた。

『我らの同時代人トリヤルフの自殺前の奇策』*Les Roueries de Triaph, notre contemporain avant son suicide, Paris, Silvestre, 1833* という標題の本であり、一八三三年、今から百三十六年前の出版だから、明らかに「古書」の名に値する古本であろう。

この古本を手に入れたのは、今から約三十八年ほど前、最初のフランス留学の折のことである。「一九三一年十月三十一日、パリにて」と扉に書入れがある通りである。入手したままの姿は、仮綴装幀が大分痛んでいて哀れ